書と箱書

43 凌雲書

会 期　6月28日(木)～9月16日(日)

月曜日休館

但し8月6日(月)から8月16日(木)まで休館いたします

―書と箱書―

野中吟雪

明治・大正時代に活躍した富岡鉄斎（1836～1924）は、近代の日本を代表する画家としてきわめて高い評価を得ている。彼は幼い頃から学問を好み、長じては詩・書・画・篆刻ともに秀れ、89歳で世を去るまで、儒者として、画家として、いわゆる典型的な文人としての生涯を送っている。

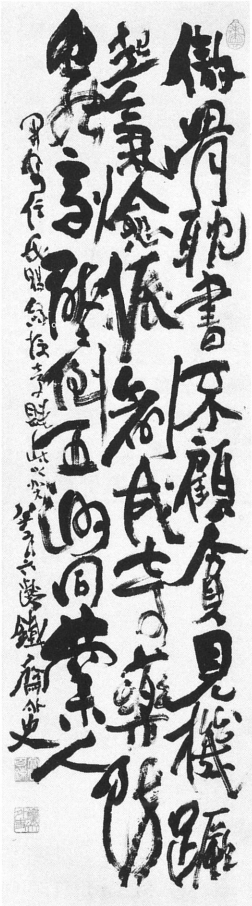
鉄斎の書は、20代半ばに書かれたものから現存するが、その後60数年間には書風に大きな展開の跡が窺われる。つまり先人の書の影響や、古今の幅広い学問、画業、全国巡遊などが書風の推移をもたらした要因と考えられるが、青年期から壮年期、さらに老年期へと、晩年に向うほど次第に内容が豊かになり気魄がこもるさまは正に驚嘆に価する。

20代から和漢の文人・金石家を憧憬し、終生これら先達の間を彷徨し、紙面を彫り込み裁ち切っていったのが彼の書である。立体感に富むゆるぎない構築性をそなえた大胆な造型は他に類を見ない鉄斎独自の世界であった。

今回はこのうち、特に箱書について述べてみたい。

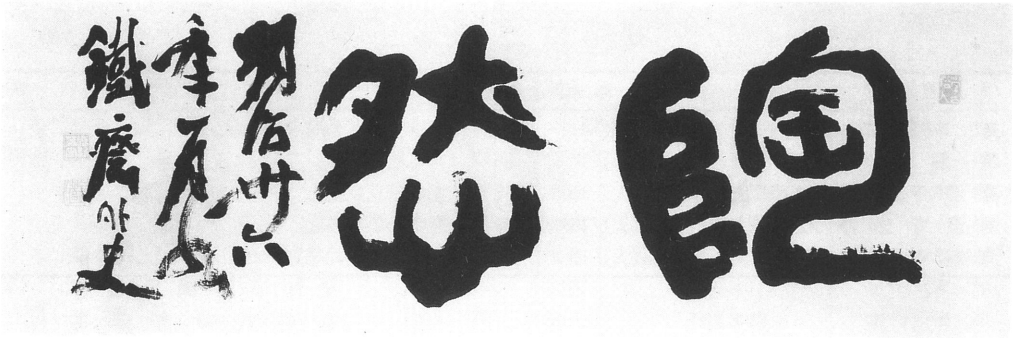
26　白居易問鶴詩書

我国では巻子や軸物の書画作品から、もろもろの茶道具に至るまで、美術品は箱に入れ、箱書をほどこして大切に保管する習慣がある。元来、箱書は収納された内容物を便宜的に箱の表面に表示するところから起った様式であり、当初は題名や作者名を記す程度であったが、その後、目利きといわれる人に箱書を依頼し、箱書そのものを鑑定の証しとする習慣が生まれた。更に茶道の隆盛とともに箱書は一層重要な意味を持つようになり、書画の筆者に直接箱書を依頼することも行われ、筆者はまた、題名の他にその書画の由来などをも併せて記すようになったのである。このようにして箱書の習慣は今日では単なる内容物の表示という枠を超え、我国特有の鑑定や文苑の雅事としてきわめて重要な役割を演じている。



37　賀立志成功詩書

鉄斎ほど多作の作家も少ないが、また彼ほど多くの箱書を遺した作家も他に例を見ない。箱書の種類においても、多くの作家がとかく一定の内容を類型的な様式によって表記するにとどまるのに対し、鉄斎は深い学識と彼の生涯を貫き通した文人精神を背景として、箱書の書式や表現



11　陶然書

にもさまざまな工夫を凝らし、一作ごとに豊かな内容を盛り込んでいる。殊に書的な観点から言及すれば、彼の箱書は従来の表記や鑑定といういわゆる書き付けとしての観念的な表現から、一躍、個性的でしかも美的な表現へと展開しており、彼は箱書そのものを書画作品とともに芸術の一分野ととらえて制作したものと見ることが出来る。その結果、これまでにない創造性に富む個性豊かな箱書の世界を築いており、これは箱書の歴史においても特筆すべきことであり、箱書に対する我々の認識を大きく転換させたといっても過言ではない。

ところで鉄斎の箱書は、現在確認されるものでは33歳のものから89歳に至るまで50数年間に亘って書かれているが、晩年になるほど数が増し、80歳代のものが圧倒的多数を占めている。箱書の様式は、一般的には蓋の表面に作品の題名を書き、裏面に款記を記すことが多い。書式は書画の落款法がそのまま用いられ、款記の内容は、(1)いつ、(2)どこで、(3)誰が、(4)なぜ、(5)何を、(6)どうした、(7)押印という七項目から成っており、このうちのいくつかを充すという方法がとられている。鉄斎の場合もまた例外ではなく、様式は主として中国の落款法に拠っており、この七項目の中から内容に即していくつかを記している。

箱書の種類は大半が鉄斎自身の制作になる書画幅に自ら題名と款記を記したいわゆる「共箱」の形式であるが、中には文房具や茶器など器玩の箱書も多く遺されている。また自作の書画の箱書の場合も、画の揮毫から年月を経てその箱に款記を施したいわゆる「再観箱」に類するものや、他人の需めに応じたり、彼が自ら知友に書き与えた旨を記す「為書き」といわれるもの、更には一つの箱に対幅や三連幅を収納するものなど、さまざまな種類が含まれている。

箱書の書体は行草体を主としているが、神事や天子に関する画題の作品にはことさら謹厳な態度で臨んでおり、楷書またはそれに近い行書を用いている。さらにこれらの落款には「位署」や「帝室技芸員」の肩書を記し、「謹書」「謹題」「敬書」「奉呈」などの語を付すのが常である。青年期より金石に親しんだ彼は、箱書にも篆書や隷書を用いることがあり、殊に晩年の篆隷体による箱書には優品が多い。いうまでもなく彼の箱書は全て漢文を原則としているが、中にはやや特殊な例として和文で書かれたものも含まれており、これらは画題や画風によって箱書の書体や書風、文体までも変化させたものと考えられる

「万巻の書を読み、万里の道を往く」という董其昌のことば（容臺集）そのままに89年を生き抜いた鉄斎は、自らを画工と見做されることを嫌い、終生「儂は儒者じゃ」と語ったというが、書画の制作においても常に「絵空事」となることを戒め、必ず典拠をもとめてそれを画題や画賛に生かしている。箱書にもこのような彼の芸術観を立証する識語をいたるところに見出すことが出来る。

この限られた小さな空間にビッシリと長文の識語が記されているが、これは生涯かたくなに「儒者である」といい通し、箱書の揮毫に際しても強仞な精神力と芸術にかける高邁な理念を貫いて、これまでにない深遠かつ多彩な美を展開させた彼の生きざまを物語るものである。

金石の気に充ち、雅趣に富む彼特有の書の美しさはいうまでもないが、幅広い学問から生まれた内容の豊かさ、伝統をふまえた落款法の秀抜さ、臨場感溢れる情景描写、さらに文人世界に身を浸し金石に遊ぶ鉄斎の学芸三昧、それらが渾然と結実して、曽てない独自の美を創り出したのが鉄斎の箱書である。

今回の企画は、鉄斎の「書作品」と「箱書」の展観である。書は30歳代のものから89歳に至るまで、書幅・書額・巻子・屏風・折本などさまざまな様式が含まれている。書体においては篆・隷・楷・行・草・仮名の各体にわたり、この他「五岳真形図」(10)、「勾白字詩七絶」(12)、「大悲観世音図」(16) など鉄斎ならではの異色作品も混っている。書の内容は漢詩・和歌・書簡のほかに神号や庵号を書いたものまで含まれている。つまり千変万化の彼の書がほぼ満遍なく網羅された展観となっている。

また鉄斎の箱書は、彼の生前から高い評価を得て、その重要性が認められてはいたものの、箱書の持つ性格上、今日までほとんど展観される機会がなく、一般的にはまだ認識が乏しいといわざるを得ない。今回の展観は全壁面の三分の一を箱書の展示に充てるという画期的なもので、しかも箱書だけを単独の作品として展示するという初めての本格的な箱書展である。

「書」と「箱書」の両面から、豪放無比・変幻自在の鉄斎芸術を満喫出来るまたとない機会である。

（新潟大学教授）

63　仏説摩訶酒仏妙楽経箱書

78　布袋遊戯図箱書

75　双寿千年絵染付煎茶碗箱書（裏）

≪出品目録≫

番号	題名	制作年代	年令	本紙寸法	材質・形状
1	宗廟之詩書	1869(明治２)	34	133.9×29.6	紙本・掛軸
2	写懐詩書	不詳	30代	137.5×29.2	紙本・掛軸
3	西遊旧詩書	不詳	30代	120.0×28.0	紙本・掛軸
4	多少箴書	不詳	30代	67.0×30.0	紙本・掛軸
5	対聯	不詳	30代	(各)124.0×12.0	紙本・掛軸
6	邨情山趣頓忘機書	不詳	30代	28.7×112.7	紙本・額装
7	菅公水中月詩書	不詳	50代	133.4×43.8	紙本・掛軸
8	仏説摩訶酒仏妙楽経	1898(明治31)	63	32.0×260.8	紙本・巻子
9	落款手本	1901(明治34)	66	29.7×1575.0	紙本・折本
10	五岳真形図	1903(明治36)	68	31.1×140.8	紙本・巻子
11	陶然書	1903(明治36)	68	33.2×96.0	紙本・額装
12	勾白字詩七絶	不詳	60代	112.0×51.2	絹本・掛軸
13	君子修道之語書	不詳	60代	138.2×44.3	絖本・掛軸
14	千秋萬々歳書	不詳	60代	123.9×30.7	紙本・掛軸
15	萬国度皇風書	不詳	60代	33.5×141.3	絹本・額装
16	大悲観世音図	1910(明治43)	75	133.0×32.6	紙本・掛軸
17	寿書	1912(明治45)	77	35.7×35.9	絹本・掛軸
18	熊図併歌	1912(大正元)	77	37.4×41.0	紙本・掛軸
19	投心遵朝命書	1913(大正２)	78	34.4×134.3	絹本・額装
20	火用慎書	不詳	70代	113.2×25.7	紙本・掛軸
21	松蘿窟書	不詳	70代	52.0×135.6	絹本・額装
22	萬歳書	1915(大正４)	80	39.7×89.2	紙本・掛軸
23	萬歳二大字書	1915(大正４)	80	199.5×89.2	紙本・掛軸
24	安心立命詩書	1916(大正５)	81	126.1×43.4	絹本・掛軸
25	慎忍書	1916(大正５)	81	41.5×131.5	絹本・額装
26	白居易問鶴詩書	1917(大正６)	82	135.5×53.0	紙本・掛軸
27	南山祝寿長書	1918(大正７)	83	136.2×41.3	絹本・掛軸
28	延命地蔵尊書	1918(大正７)	83	32.5×101.0	絹本・額装
29	百事楽嘉辰書	1918(大正７)	83	48.7×193.0	絹本・額装
30	四君子絵桐四枚折屏風	1919(大正８)	84	155.8×194.0	桐板・四曲屏風
31	祝寿聯	1920(大正９)	85	(各)131.0×20.9	絹本・掛軸
32	丈夫心事二行書	1920(大正９)	85	130.5×32.0	紙本・掛軸
33	投義志所希書	1920(大正９)	85	125.0×38.5	絹本・掛軸
34	八坂大神号書	1920(大正９)	85	122.4×31.4	紙本・掛軸
35	福星開寿域書	1920(大正９)	85	42.2×143.5	絹本・額装
36	清慎勤書	1920(大正９)	85	26.0×66.4	紙本・額装
37	賀立志成功詩書	1921(大正10)	86	144.4×39.8	紙本・掛軸
38	試筆小詩書	1923(大正12)	88	131.5×28.6	紙本・掛軸
39	寝言書	1923(大正12)	88	38.8×47.0	紙本・掛軸
40	松風蘿月書	1923(大正12)	88	31.5×126.7	紙本・額装
41	凌雲書	1923(大正12)	88	32.5×66.6	紙本・額装
42	印癖	1923(大正12)	88	31.1×132.4	紙本・巻子
43	春光庵書	1924(大正13)	89	31.8×108.0	紙本・額装
44	前赤壁賦書	1924(大正13)	89	(各)32.7×264.4	紙本・折本

書　簡

番号	宛先	制作年代	年令	内容	形状
45	角田栗堂	1908(明治41)	73	献上画の礼に対する礼状	巻子
46	西園寺陶庵公	1921(大正10)	86	新年挨拶状	掛軸
47	清澄寺光浄大和上	1923(大正12)	88	百錬堂礼状	巻子
48	清澄寺光浄大和上	1924(大正13)	89	登山予約のこと	巻子
49	清澄寺光浄大和上	1924(大正13)	89	臨終三日前、感謝の状	巻子

箱　書

番号	題名	制作年代	年令
50	普門大士図	1866(慶応2)	31
51	擬明人筆 着色山水図	1868(慶応4)	33
52	小楠公弁内侍像	1869(明治2)	34
53	勾白字詩七絶	不詳	60代
54	薬王菩薩像	1912(明治45)	77
55	寿書	1912(明治45)	77
56	竹石絵染付水注	1914(大正3)	79
57	福神遊戯図	不詳	70代
58	火用慎書	不詳	70代
59	擬土佐又平筆法 遊戯人物図	1915(大正4)	80
60	竹製樽	1916(大正5)	81
61	菩提子念珠	1916(大正5)	81
62	瓢杓	1916(大正5)	81
63	仏説摩訶酒仏妙楽経	1917(大正6)	82
64	炉扇	1917(大正6)	82
65	牡丹挿瓶・楽此幽居・柴桑高士図	1918(大正7)	83
66	静観楽事帖	1918(大正7)	83
67	扇式罐坐	1918(大正7)	83
68	老子出関・淵明遊興図	1919(大正8)	84
69	孔明躬耕図	1919(大正8)	84
70	武陵桃源図	1919(大正8)	84
71	蝸牛廬図	1920(大正9)	85
72	洛西太秦瑠璃光如来画像	1920(大正9)	85
73	八坂大神号書	1920(大正9)	85
74	狸香合	1920(大正9)	85
75	双寿千年絵染付煎茶碗	1920(大正9)	85
76	蓮月幽居図四方釜	1920(大正9)	85
77	南極寿老星図	1921(大正10)	86
78	布袋遊戯図	1921(大正10)	86
79	歳寒二雅図	1921(大正10)	86
80	懐素書蕉図	1921(大正10)	86
81	仿米岳峙淵渟図	1921(大正10)	86
82	丈夫心事二行書	1921(大正10)	86
83	祝寿聯	1921(大正10)	86
84	頼氏山紫水明荘図	1922(大正11)	87
85	水郷消夏図	1922(大正11)	87
86	扇式菓子器	1922(大正11)	87
87	後赤壁図	1923(大正12)	88
88	普陀落山観世音菩薩像	1923(大正12)	88
89	観瀑滌心図	1923(大正12)	88
90	如南山之寿図	1923(大正12)	88
91	三尊窟霊蹟図	1923(大正12)	88
92	山水・蔬菜図	1923(大正12)	88
93	宮比福御影	1924(大正13)	89
94	福内鬼外図	1924(大正13)	89
95	寿老人図	1924(大正13)	89
96	絵島・煎茶図	1924(大正13)	89
97	西湖全景図	1924(大正13)	89
98	普陀落山観世音菩薩像	1924(大正13)	89
99	仏法僧鳥図	1924(大正13)	89
100	松絵釜 銘松風	1924(大正13)	89

出品作品は期間中下記の通り二回にわけて展示いたします。
但し一部作品は重複することがあります。

前　期　6月28日(木)～8月5日(日)

後　期　8月17日(金)～9月16日(日)

鉄斎美術館　〒665 宝塚市清荒神清澄寺山内　電話 宝塚(0797)84—9600
平成2年6月20日 印施